ヨーロッパにおける地理学のフィールドワーク経験から
―ドイツ語圏での地域調査を中心に―

Geographical Fieldwork Experiences in Europe Focusing on Regional Research in German Speaking Countries

呉羽　正昭
KUREHA Masaaki

Ⅰ．はじめに

地理学者の多くは、自身の国・地域のほかにも研究対象フィールドを持つ。海外での研究を通じて研究対象である事象の地域的な広がりを把握できることのみならず、それらの特殊性や一般性が整理されるためである。それに加えて、海外フィールドに行くことを通じてしか得ることのできない研究の観点があると思われる。日本の文化や習慣のみならず、調査地域の文化などにも基づいて、自身が見たもの聞いたものを理解し、その上でそれらを地域的な性格として把握して、調査対象事象を絶対的・相対的に解明することが求められる。それゆえ、海外フィールドに出かけることは研究の幅を拡大させる効果も持つであろう。

筆者は、大学院生時代、1991年から1993年までオーストリアのインスブルック大学に留学し、1996年以降は、幸いにもさまざまな研究プロジェクトに係わりながら、毎年のように、多い年には年３回もドイツ語圏に出かけて現地調査を実施する機会を有してきた。1990年代と2000年代には、研究プロジェクトの関係で東ヨーロッパでのフィールドワークも実施したが、その後はほとんどの滞在地はオーストリアであった。

本稿では、筆者によるドイツ語圏でのフィールドワーク経験の事例に基づいて、海外調査の準備、実際の調査内容とその進め方について、またそれをうけてひとつの論文が完成するまでになされた個別スキーリゾートでのフィールドワークとまとめのプロセスについて説明する。さらに、滞在中の注意事項についてもいくつかの点に絞って報告する。

Ⅱ．渡航前の準備

まずは航空券の手配をし、職場に出張の手続きをしなければならない。日程が決まったら、宿泊施設の予約をする。かつては最初の目的地の宿だけは日本から予約し、その後は宿泊地に着いてから決めるようにしていた。しかし、2000年以降は電子メールやインターネットでの宿泊施

設予約が簡単になったこともあり、全日程の予約を事前に済ませている。筆者が頻繁に短期滞在するインスブルックやウィーン、ミュンヘンなどの都市では常宿がある。一部不満もあるがハズレを引くよりは良いと考え、満室でない限りはそれらを利用している。調査地域のリゾートにやや長期に滞在する際には、価格、キッチンなどの設備、wifiなどのサービス、立地などを考慮して予約する。レンタカーを使用する際にも、事前の早めの予約が望ましい。とくに、日本人の多くが好むオートマチック車は、ヨーロッパのレンタカーでは選択肢が少ないためである。また、現地で聞き取り調査をする相手と連絡を取ることが必要である。宿泊施設や書店ではクレジットカードでの支払が可能であるが、スーパーマーケットでの少量購入時には現金があった方が良い。筆者は、現地のATMで現金をおろすことのできるデビットカードを利用している。

直前には持ち物の準備が必要となる。パスポートや筆記用具、ノートパソコンやカメラとその付随品は必須である。これらはいずれも機内に持ち込む。スーツケースに詰める荷物の大半は衣類で、現地の気候を考慮して揃える。一週間程度の滞在であれば、滞在中に洗濯をしないことを前提に衣類を準備する。わざと古い衣類を持参して使用後に現地で廃棄したこともある。宿泊施設の室内でくつろぐためにスリッパまたはサンダルが必須で、サンダルであれば朝食時に履いていくことも可能である。自炊をするときには、筆者は小型のラップ（現地のスーパーマーケットでは大型でかなり質の悪いものしか売られていない）と割り箸、インスタント味噌汁、レトルトカレーなどを持参している。日本製のラップは品質に優れ、冷蔵庫での食材保管などに重宝する。また、スマートフォン保持者には、現地で使用できるSIMカードが便利で、ヨーロッパ全域をカバーするものであれば入れ替えることもなく使用できるので大変便利である。SIMカードはオーストリアなどでは現地で安価に調達することも可能であるが、同国でしか利用できない。調査先には手土産を準備することが良い。たとえば、緑茶葉、手ぬぐい、和風ハンカチなどのかさばらずに軽いものが便利である。出国する空港で購入することも可能である。

Ⅲ．現地での調査遂行

１．資料収集

（１）書店・地図専門店で

現地、とくに大都市での書店、とくに大型書店には多くの品揃えがあり、重要な資料収集先である。かつては、その場で購入することも多かったが、そこで内容をみて滞在中に紀伊國屋等に注文してしまうことが多い。一方、現地やその専門書店でしか入手できない本や地図は購入しなければならない。スマートフォンを用いてその場でインターネット検索し、入手可能性を調べる。

地理学者にとって、地図は重要な研究資料である。しかも、地図はたびたび更新されるので、更新版も必ず購入することを心がけている。インターネット上の地図情報は基本的には最新版が公開されるのみで、過去のデータは公開されない例が多いためである。

（２）図書館で

図書館も資料収集先として重要である。ドイツ語圏の国立・州立図書館や大学図書館は一般に大規模であり、多くの資料を所有している。日本でもそうであるが、図書館のルールを覚えることが必須である。筆者の印象では、日本では国内の図書館の利用・配架ルールは比較的類似しているが、ドイツ語圏では千差万別である。ドイツ語圏の図書館で共通している点は、基本的に開架式が少なく、多くの資料は書庫にあることである。そのため、検索をうまく活用して、必要な資料を書庫から出してもらう必要がある。かつてはカードの検索方式で書名やラベル番号を手書きして申請する作業が大変であったが、現在はオンライン検索が一般的となり、非常に簡素化された。日本で事前に検索し、その結果をプリントアウトしていけばより早く現物にたどり着ける。もちろん、近年の博士学位論文は全文が公開されるようになっているので、日本に居ながらにして読める。一方、ドイツ語圏では多くの雑誌論文・紀要がオンライン化されているが、バックナンバーは未対応の場合も多いため、図書館での閲覧が必須である。

図書館内に入れるかどうかもハードルである。たとえば、オーストリア国立図書館は入場料をとる（１日３ユーロ；年間パス30ユーロ（2020年現在））。また、2015年、ウィーン経済大学図書館では、外来者は住民登録票を提示せよと指示された。この指示に従えば、現地に居住していない研究者は同大学の図書館を利用できないことになる。たぶん裏技があったとは思うが、その時には同じ資料を別の図書館で閲覧できることが分かっていたので、食い下がることは止めておいた。一方、インスブルック大学図書館は州（チロル州）の図書館でもあり、誰でも利用者カードをつくることができ、借り出しも可能である（日本から書籍の借り出し予約もできる）。カバン等を収納するロッカーの利用方法も、図書館によって異なるので注意が必要である。

ほとんどの図書館で本や雑誌のコピーが可能である。しかし、ドイツ語圏では一般に旧式のコピー機が多く、複写の品質が悪い、コピー用紙が厚い、用紙サイズがA4しかない（A3対応機械も少しある）といった問題もある。さらに、硬貨でコピー可能だが、おつりが出ないなどの故障も頻繁にみられる。コピーカードを購入した方が安いが、別の場所の文房具店で販売されていたりと不便な点もある。ただし、近年はUSBへの保存が可能なコピー機もある。ちなみにコピー料金は、コピーカード利用の場合には一枚当たり数円ですみ、日本よりは安い。

一方、大学の学科単位で設置される小規模専門図書室は利用しやすい。たとえば、筆者の場合では、ウィーン大学地理学教室の図書室、インスブルック大学体育学部の図書室などである。いずれも基本は開架式で、ほとんどの書籍や学術雑誌のバックナンバーなどをその場で手にとって見ることができる。また、公設・私設の研究所や博物館が図書室を開放している場合もある。筆者はミュンヘンにあるドイツ山岳会の図書室をしばしば利用する。ただし、こうした小規模図書室は毎日開館しているわけではないため、情報に注意が必要である。

（３）統計局で

現在、統計の多くはインターネット上で入手できるようになっているが、過去の統計の閲覧や公表されていないデータの入手のために統計局を訪問することが多い。統計書の販売部門があったり、過去の統計書などが閲覧・コピーできる図書館（室）もある。たとえば、オーストリア共和国の統計局や、ドイツにおける州ごとの統計局も一般に大規模である。

２．聞き取り調査

聞き取り調査では、アポイントメントの有無が非常に大事である。アポイントメントを取る際には、現地の共同研究者が重要な役割を果たしてくれる。筆者の場合には、インスブルック大学留学時の副指導教員Ｈ先生がツーリズムの専門家であり、同国チロル州の観光協会関係者に広い人脈をもつためにそれを利用させてもらい、調査地域の村長や観光協会長に聞き取り調査のアポイントメントを取得することができた。その際、ドイツ語でやり取りができることはスムーズに進行する鍵となった。というのも、そうした有力者にたどり着くことができると、そこから雪だるま式に索道会社や観光協会の統計部門へのアポイントメント取得が容易になったためである。2000年前後にチェコ西部の温泉地を調査していた際には、科研費プロジェクトの現地研究協力者（バイロイト大学教授）がその役割を担ってくれた。同大学のチェコ人留学生がカルロヴィ・ヴァリ（Karlovy Vary）に同行し、温泉協会や宿泊施設での調査が可能となった（呉羽 2004）。

一方、自分自身でアポイントメントを取った例もある。オーストリア中央部のザルツカマーグート南部に位置するハルシュタットの村長に、ホームページを参照して把握したアドレスに直接電子メールで聞き取り調査の依頼をした。半ばあきらめてはいたものの、村長からすぐに返事が届き、聞き取り調査を快諾された。後日、現地で小一時間の聞き取り調査を実施し、多くの統計データも入手することができた。その結果は、呉羽（2018a）にまとめられている。

３．土地利用調査

土地利用調査は地理学者の得意技である。極端な例では、その地域の言語が不明でも、建物の色や階数、用途、農地の作物などを把握することができる。土地利用調査・分析を行う上で重要な点の一つにベースマップの準備がある。かつてはその準備が大変であったが、今日ではグーグルマップも利用可能である。一部の地域については、国や州の測量部局で、空中写真や大縮尺の地図が入手可能となっている。それに加えて、都市やリゾートの観光協会などが作成している案内図についても縮尺が正確である場合が多く、PDF版が利用可能であれば、そのままパソコンの作図にも使えるベースマップとなる。

さらにドイツ語圏では住所表記のわかりやすさが、調査を容易に遂行されてくれる。名前がつけられた「通り」があり、それに沿って中心部に近い方から、左側は奇数で右側は偶数で番号が順序通りに振られている。家屋の入り口には番号が記された看板があるため、その番号を地図と利用内容情報とで管理することが簡単にできる。ただし、宿泊施設や飲食店は顧客サービスのために住所表記が分かりやすいが、一般民家や従業員寮の場合については把握困難な場合もある。

４．写真撮影

写真については、論文でどのような写真が必要か、どのような写真を論文内で使用するかについて、常に考えて撮影することが肝心である。慣れるまではたくさん撮影するしかない。かつて、筆者は2000年前後まではフィルムカメラで撮影していたが、2000年代半ば以降はデジタルカメラを利用している。ただし、予備のメモリーやバッテリーの準備も忘れてはならないし、

データの消失には注意を要する。とくに、冬季にはバッテリーの消耗が早いため、予備のバッテリーを内ポケットに入れておいたり、毎晩欠かさずに充電をしなければならない。

Ⅳ．イシュグルでの研究プロセスの事例

イシュグル（Ischgl）はチロル州西部のパッツナウン谷（Patznauntal）に位置する大規模スキーリゾートである。1960年頃までは、生産性の悪い谷底農村であったが、その後にスキー場が整備された。スキー場は徐々に拡大され、スイス側の村サムナウン（Samnaun）と結合されて大規模スキー場となった。それとともにリゾートタウンも拡大して、知名度の高いスキーリゾートへと成長した。以下では、イシュグルに関する筆者の研究成果（呉羽 2018b）が誕生したプロセスを述べる。なお、各回の調査は、それぞれ７日程度の日程でのヨーロッパ訪問中になされているが、イシュグルでの滞在期間は半日から４日程度と幅がある。

筆者がイシュグルを初めて訪れたのは1993年４月のことで、インスブルック大学留学中に野外巡検に参加したのであった。観光協会で説明を聞き、チロル州の中で比較的新しく成立したスキーリゾートと位置づけられ、アプレスキー（Après-skiフランス語（英語でアフタースキー））が盛んであり、アパートメント（Apartment；ドイツ語でFerienwohnung）[1]が比較的多いことが、当時のフィールドノートのメモに残されている。しかし、筆者はその後、博士論文の調査をゼルデン（Sölden）で進めたため（Kureha 1995）、イシュグルのことはあまり印象に残らなかった。

2011年、偶然にイシュグルを再訪することになった。『オーストリアの風景』（浮田ほか 2015）の執筆準備のために、オーストリア最西端のフォアアールベルク州のモンタフォン（Montafon）を訪問し、そこから前述のゼルデンに移動する途中でイシュグルに立ち寄ったのである。1993年に訪問した記憶はほとんど薄れており、大規模なホテルが林立する景観に驚いた（写真１）。

2013年は、ゼルデンでの本格的な調査の間に、短時間イシュグルを訪問した（この時のゼルデンでの調査結果は、呉羽（2017）にまとめられている）。予備調査としての訪問を通じて、ゼルデンとイシュグルを比較検討してみた。その中で、ゼルデンに比べイシュグルの宿泊施設がより大規模化している点や飲食施設が充実している点が重要なポイントであると気がついた。

2015年には夏季の景観観察を実施した。科研費で「景観変化とイメージ創造に基づいたリゾート発展モデルの構築」（挑戦的萌芽研究）を取得し、オーストリアのスキーリゾートを対象として調査・分析を実施することにした。その過程で、イシュグルのほかに、発展著しい国内のスキーリゾートを訪問して観察した。それは、東からサールバッハヒンターグレム（Saalbach-Hinterglemm）、キッツビューエル（Kitzbühel）、マイヤーホーフェン（Mayrhofen）、ゲルロス（Gerlos）、オーバーグルグル（Obergurgl）、フィス（Fiss）、ゼルファウス（Serfaus）、ザンクトア

1 独立したリビングと寝室のほかに自炊設備やバス・トイレなどを備えたユニットとしての宿泊施設をさす。家族や友人同士で利用する場合、同ランクのホテルに比べて利用料金が安価であり、ホテルの部屋が通常狭いのに対して日常生活に類似する空間規模をもつ。日本国内では、北海道のニセコ地域や長野県白馬村など、欧米系インバウンドスキーヤーが卓越する地域で多くみられる。

ントン（Sankt Anton am Arlberg)、レッヒ（Lech）などである。それらの例と比較して、イシュグルでは過剰な開発が際立っていた。そこで、先述のＨ先生からの情報も加味して具体的な研究対象地域をイシュグルにすることを決めた。それをうけて、インスブルック大学の図書館と地理学教室で、イシュグルに関係する文献および統計資料の収集を開始した。

2016年２月には冬季の景観を短時間観察することができた。イシュグルの夏季は閑散期であり、賑わいのある冬季とは雰囲気が全く異なっていた（写真２、３）。

2016年の夏には、イシュグルで土地利用調査を実施した。おもに建物調査で、観光協会が刊行しているデジタル版施設分布図をベースマップとして、通りに沿って建物番号順に調査を実施した。外観を観察してホテル（写真４）なのかアパートメントなのかについて、また商業施設であればその種類や名称、建物の階数や規模を把握していった。徒歩で実施し、途中で写真撮影を行いながら進めたため、調査にはおよそ３日を要した。

2017年２月には少し長く滞在する時間があり、冬季にのみ稼働しているゴンドラリフト駅舎内のサービス施設、アプレスキー施設(写真５)、さらには実際にスキー場(写真６)内でのスキーヤーの活動を観察することができた。同時に、スキーヤーのおおまかな年齢層、話している言語の観察に加えて、リゾートタウン内でどこが賑わっている場所なのか、スーパーマーケットでどのような物をどれくらい購入しているのかといった点もある程度は把握できた。

2017年３月、それまでの調査結果をまとめ、日本スキー学会の大会で「スキーリゾート・イシュグルの発展プロセス－オーストリアにおけるスキーリゾート発展プロセスの解明－」と題して発表した。そこでは、スキー場の索道更新や人工降雪機の大規模導入といった継続的開発、リゾートタウン内の大規模立体駐車場、歩行者向けトンネルといった積極的インフラ整備に関する質問を受け、それらについては次回の現地での聞き取り調査で解決するように計画を立てた。

2017年の夏には主に聞き取り調査を実施した。村長および観光協会職員に対する聞き取り調査を通じて、公的なインフラ整備やスキー場開発の動向、訪問者の行動パターン、訪問者によるイシュグル評価などについて、理解することができた。

2018年２月には、最終的な冬季景観の観察を実施した。それまでの調査・分析結果に選択した写真を付加し、さらにはイシュグルで有名なスキー場内コンサートに関する情報をインターネットで集めて補足して論文にまとめた。それを日本スキー学会の査読誌『スキー研究』に投稿し、受理された。

Ⅴ．現地滞在中の主な注意事項

ここでは、ドイツ語圏を中心としてヨーロッパに滞在する中で、調査とは別の部分で筆者が注意・実践してきた事項について述べる。

まず飲食である。朝食は、多くのホテルで付随しているが、筆者が利用するような比較的安価なホテルでは、コンチネンタル・ブレックファーストが一般的であった。しかし、2000年前後以降は、一般にヨーロッパの多くのホテルでビュッフェ形式が導入され、パンやチーズ、果実の

写真１　イシュグルの全景（2016年９月撮影）

写真２　夏季の中心部（2016年９月撮影）

写真３　冬季の中心部（2017年２月撮影）

写真４　大規模ホテル集積（2018年２月撮影）

写真５　アプレスキー施設（2017年２月撮影）

写真６　スキー場（2017年２月撮影）

選択肢が広がるとともに、その日の調査に向けてエネルギーが補給できるようになった。

昼食と夕食は基本的に外食であった。昼食は、リゾートでは、調査時間を節約するために、スーパーマーケットや肉屋でサンドイッチを購入してベンチに座って摂る形態が多い。ハムや

チーズを機械で薄切りしてパンに挟んでくれるものが手軽である。都市滞在中であれば大学の学生食堂で済ませる場合もある。ドイツ語圏の学生食堂は財布には優しく、またビュッフェ形式のため時間の節約になるが、味の点ではハズレもあるので注意が必要である。

夕食については、当初は現地のドイツ語圏ローカル食と中華料理やインド料理を主とするアジア食を適当に組み合わせていたが、2010年頃からいずれも量が多く野菜が少ないことや油が多く使用されていることへの適応が困難になってきた。それゆえ、徐々に毎晩の外食を避けるようになり、ケバブサンドやパンとハムやチーズ、トマトなどを購入し、ホテルの部屋でビールやワインとともに楽しむことも増えてきた。リゾート滞在時には、キッチン付きのアパートメントを選ぶようにしている。備え付けのIHコンロや電子レンジで自炊が可能になり、また冷蔵庫で食材や白ワインなどを冷やすことができる。現地のスーパーマーケットでは米やパン、野菜、卵、肉、ハムやチーズ、バターなどが購入でき、2010年頃からはアジア系のインスタント食品（たとえば、焼きそばやインスタントラーメン）も販売されている。もちろん、パスタ、ハムやチーズ、ビールやワインなどの品揃えは日本よりも充実している。味噌汁やダシなどの調味料を日本から持参すれば、日本食も楽しめる。アパートメントは、スキーリゾートでの１人滞在時、とくに宿泊料金が跳ね上がる冬季には利用しづらいが、夏季には比較的安価に利用できる。

第２にフィールドワーク時のトイレである。それは、日本とは異なってヨーロッパでは公衆トイレがかなり少ないためである。ドイツ語圏の都市であればデパートやショッピングセンター（ただし日曜日は休業）、また駅には公衆トイレがある。前者には係員がいる場合もあるが、入り口に皿がおかれてあり、その上に硬貨（20セントや50セント）をのせる場合もある。義務ではないが、現地の人々は「使用料」をおいて帰っている。都市の駅トイレでは料金を入れないと入場できない場合が多いが、農村の駅では多くが無料で利用できる。一般の商店やスーパーマーケットにはトイレはほとんどないが、飲食店には必ずある。農村であれば、昼食かコーヒーブレイクで飲食店・喫茶店に寄るしかないが、役場や教会、リフト駅でトイレが利用可能である場合（有料の場合も）もある。

第３に、滞在中の危険な面である。ドイツ語圏では一般に危険は地区は少ない。とくにリゾートでは危険な側面はほとんどない。ただし、一般にドイツの大都市の鉄道駅付近では浮浪者も多く、夜間の一人歩きは避けている。一方、1990年代後半に訪問した東ヨーロッパでは、プラハでスリにあったり、ブダペストで偽警官に脅されるなど何度か危険な目に遭っている。

第４に移動手段である。レンタカーの利用は最も可動性が高いが、慣れない右側通行を強いられる。冬季には雪道運転のリスクがあるので利用を避け、夏季にはレンタカーでリゾート間を移動することが多い。また長距離移動や冬季の移動には、もっぱら公共交通機関を利用している。国や州を地域単位とした週間（月間）パスがあると、対象範囲内の列車やバスが乗り放題となるのみならず、切符を購入する手間が省ける。ただし、リゾートへのアクセスは自家用車を中心として考えられており、バスの本数は一般にかなり少ない。また、ヨーロッパの鉄道では、多様な事前割引での切符購入が可能である。日程が決まっていて早めに予約をすると、日本国内からでもインターネット購入で半額程度の価格で購入できる。ただし、予約変更不可能などの制限もあ

り、さらに長距離列車は遅延も多いので時間に余裕をみることが必要である。

Ⅵ．おわりに

本稿は、筆者によるドイツ語圏でのフィールドワーク経験の事例に基づいて、海外調査の準備、実際の調査内容とその進め方、一成果が完成するまでのフィールドワークプロセスなどをまとめたものである。筆者にとっては、ヨーロッパに行き、そこで景観や人びとの行動を観察して考えることが研究スタイルになっている。もちろん出発前にも日本国内で検討することも多いが、滞在中に見聞したことが多くの研究成果に結びついているように思われる。最後に、本稿にはいくつかの注意すべき点も挙げているが、これは全てではないこと、食については好みにも依存するので一般的ではないことを付記しておく。

参考文献

浮田典良・加賀美雅弘・藤塚吉浩・呉羽正昭 2015『オーストリアの風景』ナカニシヤ出版。

呉羽正昭 2004「チェコの温泉地カルロヴィ・ヴァリの変容」『人文地理学研究』28巻，49-76頁。

呉羽正昭 2017『スキーリゾートの発展プロセス―日本とオーストリアの比較研究―』二宮書店。

呉羽正昭 2018a「オーストリア・ハルシュタットにおける世界遺産登録地の商品化―ヨーロッパの世界文化遺産登録地におけるオーバーツーリズムの分析―」『地理空間』11巻３号，47-65頁。

呉羽正昭 2018b「オーストリアアルプスにおけるスキーリゾート発展プロセス―チロル州イシュグルの事例―」『スキー研究』15巻１号，49-60頁。

Kureha, Masaaki. 1995 *Wintersportgebiete in Österreich und Japan.* Innsbruck, Selbstverlag des Instituts für Geographie der Universität Innsbruck (=Innsbrucker Geographische Studien Band 24).